

**関東形成外科学会 第300回東京地方会プログラム**  
**2021年7月3日(土) 10:00 ~ 2021年7月4日(日) 17:00**

開催場所：Web上特設サイトにて

※日本形成外科学会マイページ (<https://mypage.sasj2.net/jsprs/login>) にログイン後、特設サイトへのリンクをアクセスいただき (アクセスキーが必要となります)、演題を視聴してください。

今回の学術集会は、

「開催期間中に特設サイトへアクセスし、演題を1演題以上視聴した」

方を参加者として取り扱わせていただきます。

参加証については上記記録が認められた方へ、学会名簿に登録いただいているメールアドレスへ7月12(月)以降、順次事務局よりお送りさせていただきます。

### 【発表演題一覧】

#### ① 頭蓋骨弁および人工硬膜の感染による上眼瞼瘻孔の1例

千葉大学 形成外科

○山本まどか、窪田吉孝、新井美波、緒方英之、秋田新介、三川信之

上眼瞼瘻孔は比較的稀である。頭蓋骨弁および人工硬膜の感染が原因と考えられた上眼瞼瘻孔の1例を報告する。症例：16歳男性。難治性てんかんあり15歳時に電極挿入術、皮質切除術を受けた。術後1ヶ月頃から左上眼瞼瘻孔と閉瞼不全を生じた。確認のため頭蓋骨を展開したところ、骨弁と人工硬膜に肉芽があり瘻孔と連続していた。骨弁と人工硬膜を除去し大腿筋膜で硬膜再建した。術後、瘻孔は閉鎖し閉瞼不全も消失した。

#### ② 慢性腎不全患者に生じた calciphylaxis の一例

日本大学医学部附属板橋病院 形成外科

○菅原隆、松田由佳利、宮下采子、吉田光徳、檜村勉、菊池雄二、副島一孝

慢性腎不全患者において微小血管が石灰化し閉塞することで有痛性の難治性潰瘍が生じる calciphylaxis という病態が知られている。我々は腹膜透析患者において原因不明の難治性潰瘍を繰り返し、病理検査で確定診断に至った症例を経験した。本疾患は創傷治療だけではなく内科的な加療も必要となるため鑑別の重要性は大きい。本疾患の認知度は高まってきているが現在も多く症例が看過されていると考えられ、さらなる周知が必要と考えられる。

### ③ 重症 COVID-19 治療中にコンパートメント症候群をきたした一例

東京医科大学 形成外科学分野

○池田千枝莉、伊藤謹民、尾島洋介、松村一

症例は 43 歳女性。重症 COVID-19 治療中に施行した造影 CT 検査で、前腕皮下への造影剤血管外漏出を合併した。数日後、筋区画内圧上昇を認めコンパートメント症候群の診断にて、減張切開を施行したところ皮下にびまん性の出血を認めた。COVID-19 を引き起こす SARS-CoV-2 は出血、血小板減少症、凝固亢進など様々な凝固異常や血管内皮細胞障害と強く関連している。本症例について、文献的考察を加えて報告する。

### ④ 結腸穿孔腹壁穿破により生じた腹壁膿瘍の治療経験—NPWTid と micrograft を用いて治癒しえた 1 例

1) 北里大学メディカルセンター 形成外科

2) 北里大学 医学部 形成外科・美容外科学

○油井佐恵子<sup>1</sup>、新美雄大<sup>2</sup>、馬場香子<sup>1</sup>

症例：59 歳女性。主訴：腹壁膿瘍切開後。

現病歴；結腸穿孔腹壁穿破で敗血症となり外科で緊急手術を施行した。腹壁膿瘍切開後の創に対し当科を受診した。

初診時所見；創の底部は腸管と連続し、周囲には腸液漏出を認める腸管へのカテーテルが存在した。

経過；NPWTid と micrograft を用いて治療を行い、腹壁膿瘍は micrograft 後 4 週目に治癒した。

考察；低侵襲で行える NPWTid と micrograft を用いた治療は、高リスク患者の難治性軟部組織損傷に対し有用であった。

### ⑤ 1 才 2 ヶ月女児の鎖骨上部に生じた肉芽腫の一例

帝京大学ちば総合医療センター 形成外科

○小林尚志

臨床診断不明として肉芽腫性病変を切除し、病理標本にて結核性肉芽腫と診断した 1 例を経験したので報告する。症例は 1 才 2 ヶ月女児。左鎖骨上部の腫瘍を主訴に当科を初診した。炎症性腫瘍を疑って抗生剤の内服投与を行ったが改善せず、MRI を撮影したが、明確な診断を得られずに、切除生検を行った。病理診断にて結核性肉芽腫と診断した。検討の結果、抗結核薬の内服は行わなかった。術後 3 年、再発無く経過している。

## ⑥ 小児血管腫に対する術中出血コントロール法

東京大学 形成外科

○瓢子梓、栗田昌和、栗田大地、森脇裕太、加地展之、岡崎睦

小児血管腫において、早期に手術を望まれる場合には、術中の出血コントロールが重要である。2cm幅に切った15Frのシリコンチューブを血管腫の周囲を囲むように縫い付け、周囲組織の血流を一時的に遮断する皮膚タニケットおよび、切除病変断端の竈縫いを併用して小児の血管腫3例の切除術を行い、良好な出血コントロールを得た。簡便で有効性の高い手技であると考えられたため報告する。

## ⑦ Eccrine angiomatous hemartoma の1例

1) 昭和大学横浜市北部病院 形成外科

2) 昭和大学藤が丘病院 形成外科

3) 東京臨海病院 形成外科

○小島永稔<sup>1</sup>、大塚尚治<sup>1</sup>、新井清信<sup>1</sup>、黒田正義<sup>2</sup>、藤本裕樹<sup>3</sup>

症例は64歳、男性。2年以上前から自覚していた腫瘍の疼痛を主訴に受診、左殿裂部に約12×6cm大の皮膚腫瘍を認めた。

切除術は断端3mmで施行した。組織診断はEccrine angiomatous hemartomaであった。

本症は四肢に発生例が多く、殿裂部に臨床像を呈する症例は稀である。また発症年齢に関しても比較的まれであると考えられた。

## ⑧ 植皮片固定にNPWT機器を用いる際の当院における工夫

1) 群馬大学医学部附属病院 形成外科

2) 群馬大学医学部附属病院 歯科口腔・顎顔面外科

○正田晃基<sup>1</sup>、牧口貴哉<sup>1</sup>、青木大地<sup>1</sup>、山津幸恵<sup>1</sup>、森有実<sup>1</sup>、横尾聡<sup>2</sup>

植皮片の固定にNPWT機器を用いる方法は本邦でも多く報告されている。一方でNPWTによる植皮固定は浸出液管理の問題から、従来法と比較して生着率が低いという報告がある。2020年度に当院で行ったNPWTによる植皮固定は8例あり、7例で良好な植皮生着が得られていたため、その治療経験を報告、考察する。

以上

\*=====\*

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2-4-12 新宿ラムダックビル 9F

関東形成外科学会事務局 中島 駿一

TEL : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176

E-MAIL tprs-office01@shunkosha.com

\*=====\*